

## 貨幣の純粋理論

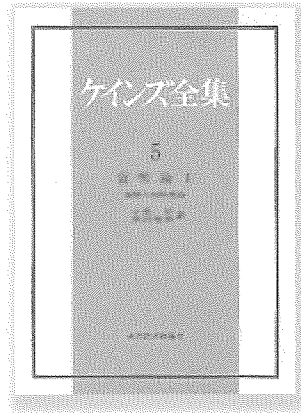
### (ケインズ全集 5、貨幣論 I)

J. M. ケインズ[著] 小泉明、長沢惟恭訳  
東洋経済新報社 1979

## 貨幣の応用理論

### (ケインズ全集 6、貨幣論 II)

J. M. ケインズ[著] 長沢惟恭訳  
東洋経済新報社 1980



---

## 経営学部准教授 佐々木 浩二

ケインズ著『貨幣論』を紹介します。経済学部  
に所属していない人も、著者の名前を聞いたこと  
があるかもしれません。「マクロ経済学の父」と評  
される英国の経済学者ジョン・メイナード・ケイ  
ンズは、たくさんの著作を残しています。分厚い  
学術書から、新聞のコラムや今日のブログのよう  
なものまで様々ですが、それらは『ケインズ全集』  
(東洋経済新報社)に収められています。

著作の中でもっとも有名なのは、『雇用、利子お  
よび貨幣の一般理論』だと思いますが、難解であ  
るため学部の学生にはあまりお勧めできません。  
代わりに学部学生にもわかる『貨幣論』をお勧め  
します。

日本語に翻訳された本は上下2巻構成になっ  
ており、なかなか手強そうですが、お金の起源から  
説き起こして、私たちがつかっている現金と預金  
のしくみや、中央銀行(日本であれば日本銀行)の  
金融政策などについて分かりやすく説明していま  
す。

当時の英国は、現代的な金融のしくみがほぼす  
べて整っており、また分析に必要なデータの蓄積  
も始まっていたため、研究対象として新しく興味  
深いものであったに違いありません。

日本のこともできます。たとえば上巻(全集  
の第5巻)の19ページから20ページにかけて「多  
くの国たとえば日本などは、一つ以上の外国の中  
心地に準備を保持し、事情に応じて各中心地での  
〔準備の〕割合を変化させながら、多年のあいだ為  
替調整を用いて大きな利益を収めてきた」とあり  
ます。英国からみて地球の裏側にある日本が、国  
際金融のしくみを駆使して利益を上げていること  
に驚いていたようです。

1年生の4月に読んですべてを理解できる本で  
はありませんが、大学で学ぶ中で「読み通すこと  
ができた!」という達成感を味わえる、とても良  
い本だと思います。名著は100年経っても色褪せ  
ません。大学生活の思い出づくりに、是非手に取っ  
てみてください。